本と写真と彫刻と　　2023.7　上野茂都

当画廊での展示を打診されたのは、昨年の五月頃であったと思う。会期を問えば、七月の終わりから八月の初めという、もっとも行事を避けたい時期ではないか。決めてしまえば、最低でも半年以上は拘束されるので、その結集が「危険な暑さ」とは・・・。そんな煮え切らない思いを察したものかどうか、「私との二人展では如何ですか」という提案が、オーナーからなされたのだった。氏は「胸をお借りしたい」などとヨイショをしていたが、それを真に受けるほど、こちらも図々しくはない。一蓮托生ということで、この度の企画に至ったのである。

お互いに本を出版している事も味付けにしたかったそうで、タイトルにも「本」という言葉が入っている。私の本の中には氏の文章が結構引用されているので、その辺も加味されているのかもしれない。「本」といっても私のものはいわゆる随想録であるが、氏のは純然たる写真集である。もともと写真作家の発表形態は、写真集が主流であって、壁に展示する等は補足的なものだったそうだ。写真という媒体が、展示物というより、印刷・出版・販売に属していたのだろう。

確かに写真集という形式は、画集のようでもあり、絵本のようでもあり、詩集のようでもあり、独特の装幀を世間に曝している。今では写真作品も絵画と同じように、画廊空間に掛けられているが、一枚一枚を観賞するには、この方が適しているかもしれない。それでも写真集に思い入れがあるとすれば、所有される事で繰り返し観て貰えるし、そこには複製される事を厭わない潔さがある。画集の場合は、優良な資料である事にも重きをおかれるが、写真集はそれ自体がホンモノなのである。

とかく絵画や彫刻の分野では、何かとジツブツだのゲンブツを鑑賞することにこだわりがちなもの。もちろん作家としてはゲンブツを観られる事を想定して造っているのだが、中々そうもいかないのが世の中だ。またゲンブツを見てもらったところで、案外その寸法や質感は、各自が勝手な印象で脳内に納めていることが多い。どのみち記憶など曖昧なもので、そもそも同じ物でも見ている部分が違うのだ。記憶される形にもいつの間にか主観が入り込んでいるのかしれない。最近は自分で造った作品でさえ、思い出せないようになっているのだから、実に呆れたものだ。

彫刻は存在の美術である……。確かにそうかもしれないが、実像も記憶に置き換わった時点で、何かしらの変形が既に始まっている。こっちがこだわっているようには、相手には伝わっていないことも多々あるわけで、これはどの分野でも似たようなものだと思う。私の場合、ジツブツが眼前に現れるような優れた作品集を作ることなど、到底出来そうもない。それならばベラベラと無駄なおしゃべりをして、各自が勝手な作家像を描いてくれた方が、膨らみがあるように思えたのだ。その「本」にしてみても、ここを読み込んで欲しい、ここで感じ入って欲しい、などという箇所は、大概すっとばされていたりするものだ。それはそれで悪いことではないのだろう。状況はなんであれ、出会ったものを大事にして頂ければ、それなりのものが得られるはずだからである。ゲンブツは見られるに越したことはないが、見られなかったからといって全然ダメというわけでもないようである。